

「ご近所福祉」の充実度を調べる基準は？

ご近所力を測る

■ご近所の福祉力をデジタル化するのには不可能だが…

支え合いマップづくりでご近所福祉を進めている人にとって、「ご近所」は正体を掴み難い対象である。一見、頼りないように見えて、世話焼きさんが結構活躍しているから、案外充実しているようにも見える。地域福祉の大事な圏域として「ご近所」をどう評価したらいいのか。その評価の基準とは何か。

正直なところ、ご近所の福祉力をデジタル化するなど不可能であることは論を待たない。ただ、ご近所の福祉力を測る場合、どんな点が評価の基準になるのか、ぐらいは出てくる。それを整理してみた。末尾の図をご覧ください。

これには下地となる情報がある。支え合いマップづくりを開発した当初、ご近所診断という発想を考え出し、ご近所の福祉力をどう見積もったらいいのかを図示した。それをもとに、もっと単純な基準を今回、考案してみた。

■「ご近所」とはどこか？

ご近所力の測定をする前に、そもそも「ご近所」とはどこで、どの範囲なのかをはっきりさせておかなければならない。

たいていの福祉関係者は、自治区辺りをご近所としてしまっている。100～200世帯を「ご近所」と考えているのだ。これは誤りで、人々が助け合うのに最適の圏域というのは、もっと小さい、およそ50世帯なのである。幅を見ると30～80世帯。これ以上大きくなると、お互いが見えなくなる。助け合いは成り立たなくなるのだ。

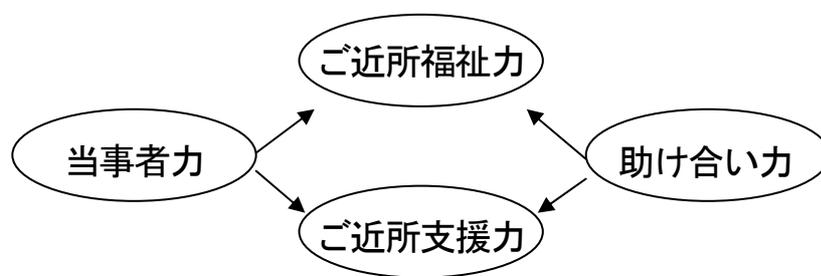
したがって、これからご近所力を測ろうという場合その前提として、この範囲であることをしっかり確認してかからなければならないのだ。この範囲には、世話焼きさんが活躍している。これ以上広くなると、動きようがなくなるのだ。だから、この小さな範囲でくくれば、ご近所福祉力はかなり上がって来る。当事者も身近な

周囲の人に助けを求めることができる。当事者力も上がる。支援力も同様だ。対象が狭いので、支援の手を伸ばしやすい。

一見、そんな小さな範囲でご近所力が測れるのかと危惧する向きがあるかもしれないが、じつはその逆で、範囲が小さくなるからこそ、その中のご近所力は強大になるのだ。

■ご近所の福祉力を測る基本的な項目は4つ

柱だけを示すと、以下のとおり。ご近所の福祉力を測る基本的な項目は4つある。①は要援護者の当事者力。②は担い手側の対応力（ご近所福祉力）、③はご近所の助け合い力。①と②がうまく機能するためのご近所のふれあいや助け合いの環境。そして④はご近所支援力。民生委員や自治会等、ご近所を支援する人たちの力量だ。



これから4つの項目を解説していこう。これを実際のマップに即して述べていく。まずは「当事者力」。住民流では、当事者が主役となる。本人が自身の問題を意識し、対策を考え、解決のための資源を掘り起こし、活用する。住民流が徹底しているご近所という圏域では、たしかに当事者が主導権を発揮していることがわかる。

(1)当事者力を測る

はじめに当事者力を測る基準を説明しよう。

- ①自立能力。簡単に施設に入らず、またサービスを受けようとせずに、ご近所さんの助け合いに頼ろうとするか。
- ②セルフヘルプ。当事者同士がご近所で助け合おうとしているか。
- ③助けられ上手。周りの人を上手に活用しようとしているか。
- ④本人も資源に。助けてもらうだけでなく、自分も担い手として行動しようとしているか。おすそ分けをいただいたら、お返しをしているか。

実際のマップではどうか。

橙色の■が一人暮らし高齢者だから、ここを見ていくとわかる。右下の部分では、「戸を開けている」「外へ出て声掛け」と、自分の安全を図るための努力をしていることがわかる。一人暮らし同士が見守り合ってもいる。「お互いに窓を開けて声掛け」と。

中央左の90歳の一人暮らし女性は「ゴミ出しを自分で」と自立努力をしている。同じく最上部の90歳の一人暮らし女性は、デイサービスから戻って、娘が返ってくる間、「淋しいとき訪問」と世話焼きさん2人の家を訪れている。その他隣人からおすそ分けをいただいたり、病院まで車で運んでもらったりしたとき、ほとんどの要援護者が「お返し」をしていることもわかる。加えて、お地蔵さんに花植え、庭作り、畑仕事など、できることはやっている。

と言うわけで、このご近所の「当事者力」は全体的にかなり優秀だとわかる。これぐらい当事者力の証拠がマップづくりで出てくるのは珍しい。

(2)ご近所福祉力を測る

次いでご近所福祉力。ご近所の福祉力がどれぐらいのものかということ。

- ①住民主体。住民の手でご近所福祉を推進しようとしているか。大事なことは、ご近所の住民が主役となって、という点である。
- ②豊富な人材。大小の世話焼きさんがたくさんいるか。
- ③ニーズ対応。ご近所のニーズにきちんと応えているか。
- ④ネットワーク。ニーズの対応で世話焼きたちが連携しているか。
- ⑤支援者と連携。民生委員などのご近所支援者とも連携しているか。

- ①豊かなふれあい。井戸端会議が盛んであるか。向こう三軒の行き来もどうか。
- ②お互いにオープン。認知症も隠さない。家のことをオープンにし合っているか。
- ③詮索し合う。互いの家の内情を知りたがっているか。
- ④お節介し合う。詮索するだけでなく、必要な場合はお節介し合っているか。
- ⑤自宅に入れる。互いに相手の家に入り合うことができているか。
- ⑥助けてと言う。困った時は「助けて!」と言えるご近所か。

まずマップで見えてくるのは、隣人同士のおつき合いの激しさである。それがおすそわけとお返しの行為となって現れている。交流が盛んであるとともに、助け合いが盛んだということだ。一人暮らし高齢者が家をオープンにし合っている。あるいは寂しい時に世話焼きさん宅に駆け込むというように、家に入り合うこともできている。これができるご近所は助け合いが容易だと言える。

寂しい時に世話焼きさん宅に駆け込むだけでなく、車での移送までできているということは、困り事をオープンにし合っている証拠ともいえる。

マップの中に点線で囲ったところがたくさんあるが、ここが井戸端会議の行われている範囲と言うことである。こんなにもあちこちで井戸端会議が開かれていた。それだけでなく、中央部に道路が走っているが、ここを世話焼きさんが散歩しながら、それに道路の両端の人が加わるというようにして、「動く井戸端会議」が開かれていると2人の世話焼きさんが証言していた。ふれあいも十分に行われていた。

(4)ご近所支援力を測る

最後がご近所支援力。ご近所の人たちの主体的な助け合いを民生委員や自治会などが上手に支援しているかということ。

- ①支援体制。第3層にご近所支援体制ができているか。
- ②訪問支援。ご近所を巡回して、ご近所の活動を支援しているか。
- ③ご近所内解決。ご近所の問題はご近所の人で解決するように働きかけているか。
- ④難題の振り分け。難しい問題は、第1層、第2層、第3層に振り分けているか。それを支援しているか。

残念ながら、今回のマップづくりでは、ここまで調べることができなかった。ただ、2人の大型世話焼きさんがかなりしっかりした人で、2人で事実上のご近所支援もこなしている。優秀な世話焼きさんだと、こういうことができるという利点がある。そうすると、課題になるのは、難しい問題を上層へ振り分けることまでやっているかどうかということだ。そこまだ突き止めることはできなかった。移送サービスをこのご近所内で、2人が個人的に請け負っているが、さらなるニーズが出てきたとき、どのように対応するか。別の担い手を掘り起こしたり、ネットを組むといったことまでできるかが課題になる。